

# オール電化・雨月物語

青柳碧人

蛇性のイン

1. 八月三十一日 芝野正司

鬱蒼と木の生い茂る山道を、芝野正司の運転する車は登っていく。噂には聞いていたが、島本のやつ、こんなところに住んでいたのか。それにしても煩わしい道だ。ナビの地図には目的地の島本宅もう見えているが、そこまでの道は腸のようにぐねぐねしており、一向に近づかない。いらいらしながら十分ほど走らせ、ようやく目的地についた。

青い屋根の平屋。壁を取り囲むように旧式の冷蔵庫がずらりと並んでいる。前来た時よりも、さらに増えたようだった。

適当な位置に車を停め、運転席から降りた。ゆく夏を惜しむかのように、セミの音が響いている。正司はあらためて冷蔵庫を眺める。すべて、鎖でがんじがらめにされている。中身が出ないようにという配慮だろう。

ふと、玄関の引き戸の上が気になった。監視カメラが仕掛けてある。こんな山奥の家に盗みに入る者がいるとも思えないが――。

「正司」

玄関に向かおうとしたところで、家屋の脇のほうから声がした。銀色の冷蔵庫の陰から、髪と髭を伸ばし放題にした、タンクトップ姿の男が手招きをしていた。共にバイクを乗り回していたころとなり変わったが、島本しまもとだった。

「久しぶりだな、元気だったか」

島本はなぜか苦々しい表情になったが、「ああ」と返事をした。

「聞いたぞ、安川やすかわの居酒屋の化け物を、追っ払ったんだって？」

「追っ払ったっていうか、まあ、封じてるんだ。その緑の冷蔵庫だ」

玄関のすぐそばに置いてある冷蔵庫を指さす。気味の悪いことを言う、と正司は改めて思ったが、今頼るべくは、この男しかいない。

「それで、相談なんだけどよ」

「ああ、まあ焦るな。今、玄関、汚れてるんだ。こっちから入ってくれ」

島本について家屋をぐるりと回っていくと、シャッターの閉じられたガレージが見えてきた。シャッターの横についているドアを開き、入れと島本は言った。蛍光灯の明かりしかない、薄暗い部屋だった。

「暗くて悪いな。だが、家の中よりむしろ、こっちのほうが涼しいんだ」

ドアを閉めると、たしかに外の暑気はシャットアウトされた。窓がないから暗いのかと思ったが、違う。窓を塞ぐふさように、五台の大型冷蔵庫が並んでいるのだ。もちろん、鎖がまとわりついている。

「そこ座ってくれ」

バーベキューで使うような簡易的なプラスチックのテーブルセットを示す。椅子を引いて腰かけると、島本は小型の冷蔵庫を開け、麦茶を取り出した。

「こいつだけは、正規の使用法で使ってるのよ」

冗談めかして冷蔵庫のドアを閉める。コップに注いだ麦茶を庄司の前に置いて自らも座ると、

「で？」

島本は訊ねた。

「ああ……」

何から話したものか。テーブル越しに浅黒い島本の顔を見ていると、

「女のことだな」

島本はまなじりを上げ、そう言った。

「わかるのか」

訊ねると、ああ、と島本はため息まじりにうなずいた。

「やっぱり蛇なんだろうな。だいぶ執念深い……」

「さすがだな」

正司は思わず漏らした。

「じつは俺、お前の力を半分くらいは疑っていたんだ。だがどうやらお前を頼ったのは正解らしい」

「ああ、そうだろうな」

「初めから、話させてくれ」

そう言って正司は、今月初めの、扇谷太郎おうやたろうの体験談から話しはじめた。

## 2. 八月一日 扇谷太郎

突き出しの昆布の煮物は、しょっぱすぎた。早くビールが来ないだろうかと思っていたら、すぐに長い暖簾のれんがめくり上げられ、「失礼します」と店員が顔を出した。

「生ビール二つ、お待ちしました」

太郎は置かれたジョッキの一つを豊雄とよおの前に差し出し、二人で乾杯する。

「あーうまい。なあ、豊雄」

つとめて明るく言ったが、豊雄は一口飲んだだけでジョッキを置き、自分の坊主頭を右手でぐるぐる撫なでた。三つ下のこの弟の、子どもころからの癖だ。もう三十三になろうというのに、バツの悪そうな笑顔はちつとも変わらない。

「なんだよ、突然二人で飲みたいなんて。しかも個室を取ってくれて」

正確には、暖簾の向こうを店員が動く足が見える、半個室という言葉やつだが、かまわないだろう。

「ああ、ありがとう」

「いいから話せよ」

せつつく豊雄は、急にもじもじはじめた。何も言わないのでまたビールを含むと、突然、

「俺、彼女ができたんだ」

と告げた。太郎はビールを吹き出しそうになる。

「まじかよ。名前は？　どんな女だ？」

「阿方真子あがたまこっていうんだ。二十四歳で、金持ちのお嬢様だよ」  
信じられなかった。

我が弟ながら、豊雄はどんなにひいき目に見てもハンサムとは言えない。直接的に言えば不細工ぶさいくだ。右の頬には不格好なほくろがあるし、肌は荒れ放題。顔全体が生まれつき歪ゆがんでいて、笑顔になると

その非対称性が明らかになる。小中高と野球をやっていたが運動神経もからつきしで、坊主頭だけは大人になっても変えないから、ジヤガイモが服を着て歩いているようだ。

それでもまだ、真面目に働いていれば褒めようがあるというものだ。豊雄は生まれてこの方、定職についたことがない。

扇谷家は代々、和歌山県の新宮市、三輪崎で網元をしている家系である。太郎の父、竹三は十数人の漁師を抱える網元で、自身もほぼ毎日、早朝から海に出ている。太郎は船が苦手なので内勤で船舶管理や市場とのやりとりなどを担当しているが、同時並行で大手企業と無人漁船システムの開発も行っている。漁師も人手不足の時代を迎え、代替わりしたら本格的に無人漁船の実用化を考えているのだった。

一つ下の妹、奈波ななみは大阪の水産大学に所属する研究員で、現在は白浜しろはまの水産研究センターでクラゲを殺す音波の研究に従事している。扇谷家が漁場としてしている海域では数年に一度、沖で大量発生したクラゲが押し寄せてくることがある。網が破られるのはもちろん、酸素を奪われた魚が死んで甚大な被害をもたらすことがある。もし沖でクラゲを殺し、海流に乗せて漁場に侵入するのを防ぐことができればこの悩みは解消されるので、太郎も実用化に大いに期待していた。

——というように、兄と姉が家業を守るために新時代の漁業を模索しているというのに、末弟の豊雄はまったく働こうとしない。何をしているのかと言えば、昼頃に起きてきてゲームをし、たまに街に出かけてはプラモデルを買ってきて、また数日こもる。母は早くに亡くしているので親は父の竹三しかいないが、年の離れた末っ子がかわいいのか、「そのうちなんとかするだろ」と対応は甘く、毎月いくらかの小遣いまでやっている始末だった。

「令嬢ってお前、いっどこで知り合ったんだよ？」

「一週間前、西尾にしおの店に行った帰りさ」

隣町でカラオケスナックを経営している、豊雄の数少ない友人の一人だ。開店前によく遊びに行っっては、その男とアニメの話で盛り上がるらしい。

「四時ぐらいに開店準備をはじめから帰れっというんで、外に出たら雨でさ。西尾に傘を借りて歩きはじめただけどもう、傘なんかじゃ間に合わないくらいの土砂降りになってきた。久井ひさいの交差点に近い、つぶれた中華料理屋あるだろ。あそこひたしの庇の下で雨宿りをしたんだよ。そしたら、同じように雨に降られて駆け込んだ女がいたんだ」

見た瞬間にその美しさに見ほれた、と豊雄は言った。

「白いワンピース。濡れた長い髪が背中に張り付いてさ、俺のほう

を見て恥ずかしそうに笑うんだ。水滴のついた肩がなんともみずみずしくてさ——」

豊雄は思わず彼女に「大丈夫ですか？」と話しかけた。彼女は「ええ」と答えた。豊雄は何かを話したくてしようがなかったので、さっきまで西尾と話していたアニメのあらすじを夢中でまくしたてた。彼女はいちいち笑ってくれ、「それ私も見たいです」と言ったのだという。

そのうち彼女は「そろそろ帰らなきゃ」と言った。雨は弱くはなっていたが、まだ降っていた。豊雄は西尾の傘を彼女に貸した。彼女は礼を言いながらそれを借り、去り際に自分の名前を告げた。

——阿方真子といいます。

「本当か？」

太郎は訝うしろかった。毎日アニメばかり見ていて、ついに妄想に逃げ込んでしまったのではないかと疑ったのだ。

「まあ聞いてくれ」

豊雄は食い下がる。

「それから三日後、また彼女に会いたくなかった俺は、彼女の家に行つたんだ。傘を返してもらおうという口実があるから」

豊雄は原付で絹川きぬがわの集落まで出て、鮎山あなやまに向かう山道を登った。地蔵のある分かれ道で、細いほうの私道を上つていくと、三分ほど



で、西洋の城のような立派な屋敷が現れた。閉ざされた門のすぐ脇にあるインターホンを押すと、「はい」と、まぎれもなく先日女性の声が聞こえた。

豊雄だとわかると、ほどなくして奥のドアが開き、阿方真子が出てきた。

——お待ちしていました。どうぞお入りください。

屋敷の中もまた、豪華ごうかだった。廊下には真つ赤な絨毯じゅうたんが敷かれ、見上げれば天井から星屑ほしくずを集めて作ったようなシャンデリアがぶら下がっている。部屋数は一階だけでゆうに十はあるようだった。金色のドアノブを擁したすべてのドアには天使の彫像ほとこが施してあった。

豊雄が通されたのは突き当たりの食堂だんろだった。さして広くはないものの、大理石でできた暖炉だんろに見守られ、十人掛けのテーブルがある。見たこともないような豪華な西洋料理が並べられていた。

——一緒に食べたいと思って用意したのです。

無下むげにはできないと思い、豊雄はナイフとフォークを取った。料理はどれも美味だったし、酒が弱いなりにワインも飲んだ。気分がよくなったところで、一人で住んでいるのですかと訊ねると、真子は哀しげに顔を伏せた。

——今から四年前、この家に住む夫に嫁いできました。家どうし

の話し合いで決まったことで、私に抵抗する権利はありませんでした。十歳上の夫とはそれなりに仲良くやっていますが、二年前、出張で訪れた海外で強盗に殺害されてこの世を去りました。

それ以来、この広い家に一人で住んでいるのだと彼女は言った。

——もう二度と、男の人など愛することはないと思っていたのですが……。

真子は顔を上げると椅子から立ち上がり、豊雄に近づいてきた。

初対面の時にはみずみずしさを感じさせたその顔は、酔すい気に彩さいられてなまめかしさを纏まとっていた。

——あなたと出会ってしまいました。どうか私と、お付き合いしてください。

断るはずがなかった。

二人はベッドルームに移動した。ポットイチェリの絵を想起させる、大きな貝が開いたようなデザインのベッドの上で、二人は結ばれた。そして豊雄は真子と結婚を前提とした交際をはじめたのである。

「バカバカしい」

太郎は空になった中ジョッキを置きながら、鼻で笑った。

「そんなお嬢様、いるわけがない。だいたいお前、傘を貸したとき、

彼女の住所を訊いてないだろ。どうして家に行けたんだ？」

「それは……導かれたんだろうな」

ヤバいなこいつ、と思った。完全に自分の妄想を信じ切っている目である。口をつけられていない彼のビールから、泡はすっかり消えていた。もらってしまおうかと思ったが、これ以上こんなやつと飲んでいても酒が不味<sup>まず</sup>いだけだ。

「俺は帰る。会計は済ませておくから」

「待ってくれよ」

立ち上がろうとする太郎を豊雄は止めた。

「わかるよ、兄貴。嘘だと思ってるだろ？ でもちゃんと証拠がある。真子、俺が帰るときに契<sup>ちぎ</sup>りの証だつてこれくれたんだ」

どん、とテーブルの上に何かが置かれた。ガラス製のボディといい、大きさといい、ジューサーミキサーのように見えた。だがどこか既視感がある。やがて、それが何なのかわかったとき、太郎の中に驚きと怒りがこみ上げた。

「豊雄……これを盗んだのは、お前だったのか！」

### 3. 八月二日〜三日 扇谷竹三

三輪崎港とその周辺でネズミの被害が増え始めたのは、今年に入ってからだった。初めはゴミを散らかされる程度のことだったが、

壁や柱をかじられる民家や食材を食われる飲食店が多くなり、四月には道路に飛び出してきたネズミを避けようと大型トラックが横転する事故まで発生した。こういう状況下に陥っても行政は重い腰を上げず、自治会の理事を務める竹三は、他の役員と共に頭を悩ませていた。

白浜の海洋研究センターでクラゲ駆除の研究をしている娘の奈波が、「ラッテンフェンガー」の成功報告を見つけてきたのは、六月半ばのことだった。ドイツで開発された、超音波を利用してネズミを駆除するシステムである。まずあらかじめ、専用のネズミ捕り装置「フェンガー」を市内のあちこちに仕掛けておく。次にスピーカーを通じ、当該の超音波を広範囲に流す。ネズミたちは苦しむが、フェンガーからはネズミの苦しむ超音波を軽減するための音波が流れており、おのずとネズミは装置の中に逃げ込むというわけだった。

フェンガーの一つ一つはジュースーミキサーくらいの大きさで、頂部にクローバーのような形の超音波発生装置が取り付けてある。ガラス製のボディの下部にはちょうどネズミが入り込めるくらいの穴があり、中にネズミが入り込むや否や、内部に設けられた刃がネズミのど元に食い込んで一気に絶命させる仕組みだ。単三電池二個で動く、殺戮装置である。

ラッテンフェンガーは町ぐるみの大規模なシステムでコストもか

かるが、効果は絶大だと絶賛されている——学者の娘に背中を押された竹三は、すぐに多額の寄付を申し出、自治体に導入を認めさせた。

超音波発生装置と二百個のフェンガーがドイツから送られてきたのは六月末のこと。最終調整を経て、六月三十日には設置協力を取りつけてある民家や店舗に、フェンガーを配布する手はずを整えていた。

ところが当日の朝になって、自治会の倉庫からフェンガーがごっそり盗まれていたことがわかった。二百個ともなればかなりの量だが、警察と消防団が協力して搜索しても一つも見つからず、総額四百万円以上をかけたシステムは水の泡となった。

いったい誰が盗んだのか……不可解さと悔しさに齒<sup>は</sup>嚙<sup>が</sup>みしても、もうどうしようもなかった。

それから一か月が経った、八月一日の夜八時過ぎのことである。

竹三が抱えている漁師たちと居間で酒を飲んでいると、長男の太郎が血相を変えて飛び込んできた。

「親父！」

ちよっと来てくれ、と太郎は言った。漁師たちには聞かれたいくないことなのだとすぐにわかった。居間を出ると、太郎は玄関から外へ出て、家の裏手に回った。そこには、次男の豊雄がいた。

「親父、豊雄の持っているものを見てくれ」

「ん……えっ？」

竹三は驚いた。それはまぎれもなくフェンガーだった。

「豊雄！ お前これを、どこで……」

「女にもらったんだよ」

豊雄が子どものようにべそをかきながら事情を話す。雨の日に美しい女と出会って傘を貸した。それを回収しに家に行ったら男女の関係になり、帰り際にフェンガーをもらったというのだ。

「お前まだそんなことを言うのか！」

怒鳴りつける太郎を止め、竹三は豊雄に訊ねる。

「絹川から鮎山に上っていく道の、地蔵の分かれ道を行くと  
言ったな？」

うなづく豊雄。もし竹三の記憶がたしかなら、その道の先にあるのは……あの建物だ。

「心当たりがあるのか、親父？ 今から行ってこようか？」

太郎が怖い顔で訊いてきた。生真面目な太郎にあそこに行かれるのはなんともバツが悪い。

「まあ待て。俺が明日、豊雄と一緒に行ってくる」

竹三は訝る太郎を無理やり納得させ、その場は収めた。

そして今日——朝は普通に漁をし、人目のない夜まで待って、豊

雄と二人で原付に乗って家を出た。俺も行こうとしつこいまでに言ってくる太郎を振り切るのが大変だった。

絹川からの山道に入ると、車はおろか、人も歩いていない。街灯がいでんの光すらおぼろげな、暗い道だ。前に行く豊雄の原付のテールランプを見ながら、ただ原付を走らせていく。

やがて地蔵の分かれ道までやってくる。迷いなく右折する豊雄。やはり、あそこへ向かう道だ。しかしこんな道をいまだに使う者があるとは思えなかった。

五分ほど走って、建物が見えてきた。停車させる豊雄の戸惑いが、その背中からも伝わってきた。

豊雄の言った通り、西洋の城のような外観だ。だが壁には蔓性つるせいの植物が絡みつき、窓という窓に板が打ち付けてある。明かりはついてない。当然、人がいるような気配もない。

「なんだ、これ……」

「あれを見ろ」

呆然としている息子に、竹三はライトの前にある古びた看板を示した。蔓植物に半分覆われているが、十分な情報は読み取れる。

《……INN 宿泊・八千円 休憩・三千円》

「ラブホテルだ。だがもう、三十何年前に廃業になった」

竹三は告げる。亡き妻と結婚する前に二度ほど来たことがあるの

は、もちろん黙っていた。

「嘘だ！」

豊雄は叫んで、原付から降りた。

「そこに門があつて、インターホンがあつて、俺は真子を呼び出した」

原付のメットインから懐中電灯を取り出し、建物に向かっていく。

「おい、待て」

竹三もついていくと、両開きのドアの間に隙間すきまがあつた。

「開いているのか……？」

「親父、このドアだよ。このドアから真子が出てきたんだ」

ノブを握り、ドアを引き開ける豊雄。

「真子、真子！」

叫びながら豊雄は入っていく息子の後を追う。廊下はかつて絨毯敷きだったと記憶している。だが今はカビに覆われ、ところどころに草まで生えていた。

「そう、そう、同じだ。シャンデリアも、ドアについていた天使も……  
なんでこんなに朽ちているんだ？」

壁や天井を懐中電灯で照らしながら、豊雄は混乱している様子だった。

「三十年以上前に廃業したといっただろ。廃墟なんだよ」



「あっ」

竹三を無視し、突き当りのひとときわ大きい扉に走り寄り寄る豊雄。一生懸命ノブを引いているが、ここは鍵がかかっているようだ。

「この向こうは食堂になってるんだ。真子、真子！」

「落ち着け豊雄。お前は幻を見たんだ」

「いや、違う。俺たちは食事をした後——」右方向に懐中電灯を向ける豊雄。十メートルばかり離れた位置に青いドアがあった。他のドアと違って劣化した様子がない。不吉な予感が竹三を襲う。

豊雄はためらわず、ノブを握る。ドアは、開いた。下水道のような臭気が中から漏れ出てきた。

「——はっ」

懐中電灯に照らされた中を覗き、竹三は呼吸を止める。のぞ

客室なのだろう。大きな貝をモチーフにしたベッドがある。そのシーツの上に——女がいた。

二十四、五歳の女性が足を崩して座り、こちらをじっと見つめているのだった。女は、下半身に白い布をまとっただけだった。

「真子……」

豊雄は嬉しそうにつぶやいた。確かに美しい女だった。豊かな黒髪が肩や胸にはりついた姿が、なんともなまめかしい。しかし、近づいていい存在ではないと竹三は悟った。

「真子！」

懐中電灯を投げ出し、豊雄は彼女に飛び掛かっていく。馬鹿、という竹三の叫びが届く前に、ぐしゃつと濡れた何かに豊雄が飛びついた音がした。

貝のベッドに光が降り注ぐ。乳白色のそれではなく、赤に緑に青と毒々しい色が次々と入れ替わる、淫靡いんぴな照明である。

豊雄の下に、女の姿はなかった。代わりに、ベッドの上には三、四十個のフェンガーが転がっていた。竹三の体から血の気が引いた。毒々しい照明のもとではよく見えないが、すべて、中には何か黒くて毛むくじやらの塊が入っているのだ。

「真子……真子……」

ぼろぼろのシートに顔を押し付けて泣きじゃくる豊雄を落ち着かせようと一歩、部屋に入る。ぐじゅり。柔らかいものと、その中に潜む硬いものを同時に踏む感触に見舞われ「うっ」と声を出す。

床は、泥まみれだった。そのところどころにフェンガーと、何か白いものがたくさん埋まっている。

竹三は思わず叫んだ。白いものはすべて、ネズミの骨だった。

4. 八月五日〜十四日 田辺奈波 たなな

一人暮らしをしている白浜の家に、兄の太郎が豊雄を連れてきたのは、八月五日の夕方のことだった。三人で簡単な夕食を取ると、

「明日も朝から漁だから」と、太郎は三輪崎に帰っていった。

「疲れたでしょう？」

後片付けをしながら、奈波は豊雄に言った。

「お風呂、入ってきていいわよ。温泉だから」

「ああ、ありがとう。じゃあ、入らせてもらおうかな」

坊主頭をくると撫でながら、豊雄は笑った。思いのほか元気そうだ。心配していたけれど、しばらくの二人暮らしは案外楽しくなるかもしれない。

九年前に同じ大学で講師を務める田辺久雄ひさおと結婚してから、大阪に居を構えた。結婚二年目に息子の清夫きよおが生まれ、子育てと研究を両立させること六年、クラゲの大量発生に関する論文が認められ、白浜海洋先端研究センターに招かれたのは去年のことだった。外海と瀬戸内海とのちょうど境目に位置する白浜は海洋生物の種類が豊富で、かねてから海洋研究が進んでいる。夫は大阪を離れることができないが、三年という期限付きということもあり、奈波一人での

白浜行きを快く認めてくれた。センターでの研究は学生のころからの夢だったし、将来の漁業を守ることもつながると張りきった。

白浜には、かつて好景気だったころ別荘として建てられた家屋が多い。今は持ち主のいなくなったそういう家をセンターは安く買い、研究員の住まいとして提供している。電化製品も充実しているし、部屋数は多くて庭もあるし、風呂は温泉だ。夫や息子と離れて暮らす寂しさはあるものの、この一年と少し、快適な一人暮らしを奈波はけっこう満喫まんきつしていた。

そんな奈波のもとに、突然父親の竹三が電話をよこしてきた。豊雄を預かってくれないかというのだった。ひきこもりすぎて精神が異常をきたしているようだから、風光明媚ふうこうめいびな白浜で少し休ませたいとのことだった。

どうせ部屋は余っているし、家事も滞りとど気味だ。豊雄が手伝うかどうかわからないけれど断る理由もないので、奈波は快く受け入れたのだった。

「ありがとう、いい湯だったよ」

風呂から上がった豊雄は上機嫌だった。奈波は豊雄に、「はい」とメニュー冊子を渡す。

「なんだよ、これ」

「マルチクッカーでできるメニューよ」

奈波はキッチンから持ってきた、電気釜ほどの大きさの電化製品を指さす。

「焼く、炒める、煮る、蒸す、揚げる……あとなんだっけな。とにかく材料を切って入れてボタンを押したらなんでもできるっていうの」  
この家に備え付けられていたものだ。

「豊雄、材料、適当に買ってきていろいろ作ってよ。お金は渡すから」

「姉さんがやりやいだろ？」

「あたしは研究で忙しいの」

七割がた言い訳だった。奈波は昔から料理が苦手だ。魚なんて捌くものではなく、生態を研究するものだと思っている。

ここへ越してきた当初は物珍しさからマルチクツカーを使ってビーフシチューや麻婆豆腐を作ったものだが、今では分量を考えて材料を買ってることが面倒になり、店屋物が主食となっている。

「ぶーん」

豊雄は興味もなさそうにメニュー冊子をめくっている。こりや明日からも店屋物かもな……と思った。

ところが翌日の午後六時すぎ、研究を終えて帰ってみると、ダイニングの食卓には見事な天津井てんしんどんが湯気を立てていた。

「これ、マルチクツカーで作ったの？」

「ああ……ええと……」

目をそらす豊雄。マルチクツカーはきれいなままで、IHレンジの上に汚れたフライパンがあった。

「うそ。まさかフライパンで？」

食べてみると美味だった。グルメではない奈波でも、中華料理屋で出して遜色そんしよくないと思えるほどだった。

「すごくおいしいじゃない。料理の才能、あったのね」

「ああ」

褒めているというのに、豊雄は曖昧あいまいな返事をするだけだった。

翌日、夕食に出たのはオムライスだった。チキンライスの出来も卵の焼き加減も絶妙だった。そしてまた、マルチクツカーは使われていない。

「本当においしいわよ」半分平らげたところで、奈波は弟を改めて褒めた。「レストランで働いたら？ ホテルとかでもいけると思う」

「……実は俺じゃないんだ、作ったの」

「えっ？」

奈波はスプーンを止めた。

「俺の彼女なんだよ」

「彼女？」

「うん。今、俺が借りている寝室にいるんだけど、連れてきていいか

な？」

何を勝手に……と思ったが、夕食を作ってもらった手前、強くは出られなかった。

一度部屋に戻った後、豊雄がダイニングに連れてきたのは、二十代半ばくらいの華奢みやしやな女性だった。

「阿方真子といいます」

透き通るような声。奈波はその姿に見ほれてしまった。緑がかつた白いワンピースを着て、黒い髪と端正な顔立ちが美しい。髪はなぜか濡れていて、肩や胸に張り付いている。それがなんとも魅力的だった。勝手に家に入られて料理を作られた——そんなことはどうでもよくなっていた。

「なあ姉貴。俺と一緒に真子もしばらくここに置いてもらっていいか？」

豊雄は言った。

「料理は全部やってくれるっていうからさ。掃除とか洗濯とか、俺もできること手伝うよ」

「お願いします、と真子という女も頭を下げる。

「いいわよ」

奈波は、許可した。

「三人で暮らすの、楽しそうなものね」

翌日の朝食は、目玉焼きとスクランブルエッグ付きのトーストだった。ここへ来てから朝食は食わずに出て、研究所で論文を読みながら菓子パンをかじるといふ朝だったので、奈波は新鮮な気持ちになった。昼はセンターの食堂で済ませるが、帰れば、温かい料理が待っていた。スフレ、茶碗蒸し、エッグマフィン、キッシュ、親子丼……真子はマルチクツカーなど見向きもせず、鍋やフライパンで器用に作り上げるらしかった。

レストランに勤めていたの？ 奈波が訊ねると真子は笑顔を作り、曖昧にうなずくだけ。豊雄も「そんなんじゃないよ。真子は令嬢だからな」ととりなした。

「実は俺たち、結婚しようかと思ってるんだ」

豊雄がそう言ったのは、真子も同居するようになってから十日目のことだった。その日の料理はおかずが五品もあり、結婚を発表するためにこんな豪華にしたのかと奈波は合点がいった。

「いいじゃない。こんなに素敵なお嫁さんができると思ったら嬉しいわ」

「ありがとうございます」

真子は嬉しそうに微笑んだが、豊雄の顔は浮かなかった。

「だけどさ、親父と兄貴は反対してるんだ」

「そうなの？」

「ああ……姉貴、口添えしてくれないか。真子が一緒なら俺、ちゃん



と定職に就いてがんばれそうな気がするんだ」

実際、豊雄は宣言通り、洗濯や掃除を手伝ってくれている。実家では考えられないことだった。

「わかった」

奈波はその場で、父に電話をかけた。

〈もしもし、どうした？〉

「お父さん、どうして豊雄と真子さんの結婚を認めてあげないの？  
こんなに素敵なお嫁さんを迎えたら、豊雄もきつと真面目に働くわ」

〈奈波お前……何を言っている？ どうしてその女のことを知って  
いるんだ？〉

父の声は震えていた。

「今、目の前にいるもの」

テーブルの向こうで、真子は薄く微笑ほほえんでいた。  
〈なに？〉

「少し前から一緒に暮らしてるの。毎日料理を作ってくれてね。お  
父さんも食べに来ればいいのに」

〈おっ、お前！……待て、今から行く。待ってる！〉  
通話は切れた。

「変なお父さん。今からくるって」

「そうか……ま、気にせず食べようぜ」

豊雄が言う。真子はにこりと微笑んで、「まだ料理はあるんです」と冷蔵庫に向かった。

5. 八月二十日～二十九日 芝野幸一（こういち）

「お前の娘の瞳ひとみを、うちの豊雄の嫁にもらえないか」

網元の扇谷竹三から言われたのは、八月二十日の漁が終わったあとのことだった。

「本気ですか？」

網に絡みついた藻もを取る手を止め、幸一は訊き返した。

今年二十四歳になる瞳は、生まれつき口が利けない。声帯や気持ちに問題があるわけではなく、もともと脳の一部が損傷そんしょうしているらしい。筆談でコミュニケーションはとれるものの、声が出せないというコンプレックスから人前に出るのを極端に嫌がる。今は在宅でパソコン仕事をしており、きっかけがなければ外に出ない生活をしている。けして器量が悪いわけではないが、友人もいないし、恋人など作ったことがない。

「本気だよ。瞳ちゃん、豊雄のことを気に入っているって、前に言ってたよな」

「ああ、それはそうなんです」

瞳が子どものころから豊雄に気があることを、幸一は知っていた。年頃の時に手紙を書いていたのを見てしまったことがある。なんでも、学校帰りに荷物が重くて休んでいたら、突然話しかけてきて荷物を運んでくれたとのことだった。それ以来、その顔が忘れられないと書いてあった。——形の悪いジャガイモみたいな顔をしているが、と幸一は苦々しく思ったものだ。結局その手紙は、瞳が自分で破いて捨ててしまったようだった。

「しかしなんでまた？」

「豊雄のやつ、悪い女に捕まってな」

竹三さんは声を低くした。その女と縁を切らせたいがために、結婚させてしまおうというのだった。

「豊雄のやつも実は前々から瞳ちゃんのが気になっていたらしいんだ」

「そうなんですか？」

思いもよらない言葉に、幸一は驚いた。

正直なところ、漁師になるつもりもなく、かといって定職にもついでいない豊雄のことはよく思っていない。しかし、竹三さんの息子という点は悪くなかった。

幸一の弟の正司は、高校を中退したあとバイク仲間と悪さばかりしていた。その弟を更生してくれ、漁師としての人生を与えてくれ

た竹三さんのことは心から尊敬している。どうすれば恩返しができるかと、幸一はこの三十年ずっと考えてきたようなものだった。

「豊雄も結婚したら心を入れ替えて仕事を探すと言っている。瞳ちゃんにそれとなく気持ちを聞いてくれるだけでいい。頼む」

「わかりました。瞳に言ってみます」

瞳はさすがに驚いたが、最終的にはこの申し出を受け入れた。

竹三さんは一人でどんだん話を進め、ものの数日後、三輪崎じゅうの漁師を集めて祝言しゅうげんが執り行われた。何か聚焦したような竹三さんの態度に戸惑った幸一だが、祝言の席で緊張しながらも嬉しそうなのが娘の姿を見ると、感極まって涙があふれるのだった。出席した皆の祝いの言葉も心を揺さぶり、天にも昇る幸せだった。

夫婦になった二人は、扇谷家の豊雄の部屋で暮らすことになった。豊雄は瞳の伝手ついでで、在宅の仕事を見つけた。アルバイトからのスタートだが、いずれ契約社員になれるらしい。

「どうですか、二人の様子は？」

夫婦になってから三日目の漁のとき、船の上で幸一は竹三さんに訊ねた。

「仲良くやってるよ。しかし朝から晩まで、部屋でパソコンとにらめっこだ。俺らとはだいぶ違う仕事だな」

竹三さんは笑みをこぼしながら答えた。波に反射する朝日が、ま

ぶしかった。

ところが、そんな生活は長くは続かなかった。

祝言から一週間が経った日の午前三時すぎ、幸一は正司の車に同乗し、竹三さんの家に向かった。いつもは港で落ち合うのだが、三重の親戚がぶどうを送ってきたので、それを竹三さんに届けてから連れ立って港へ行こうと思ったのだった。

竹三さんの家の前で車を止め、助手席を出た瞬間、

「うおおっ！」

家の二階から竹三さんの叫び声が聞こえた。正司と顔を見合わせ、家に飛び込む。お前っ！ なぜだっ！ 竹三さんの叫び声は階段の上から聞こえていた。上っていくと、廊下の奥の襖ふすまが開き、その前で竹三さんと、長男の太郎が恐ろし気な表情で部屋の中を見ている。

「網元！」

走り寄って、部屋の中をのぞく。

豊雄と瞳の部屋のようだった。布団が敷かれているが、豊雄は部屋の隅にうずくまってガタガタ震えている。布団の上で足を崩しているのは、わが娘、瞳だった。

いや、違う——幸一は感じた。

姿かたちは瞳だが、違う。長い髪が濡れたように肩や胸に張り付き、竹三を捉えているその鋭い眼光は、娘のものではない。

その次の瞬間、驚くべきことが起きた。

「あなたが私たちを離れさせようとするからです」

瞳が、しゃべった。

「私とこの人は、夫婦の契りを交わしたのです。それなのにあなたは、豊雄さんを引き離そうとする。妻たる私が寄り添うのは当然です」

二十四年間ずっと聞きたいと思っていた、娘の声——不気味だった。それが、哀<sup>かな</sup>しかった。

「豊雄から離れるよ！」

太郎が、瞳につかみかかっていく。竹三さんは部屋の中にあつた縦型掃除機を掴み、瞳の頭に打ち付けようとした。幸一は竹三さんに飛びついてそれを止めた。

「何をするんです、竹三さん！　うちの娘です」

「違うだろう、瞳じゃない。こいつは、こいつは……真子だ。あの女だ！」

竹三さんと太郎には、姿かたちそのものが別の女に見えるようだった。

「落ち着いてください」

正司が太郎に飛びつく。瞳を含め、五人でしばらく格闘<sup>かくとう</sup>していたが、

「ああっ!!」

瞳が甲高い声<sup>かんだか</sup>を上げたので、幸一たちは動きを止めた。瞳は、正司の顔を見てニヤリと笑っていた。今まで見たことのない、奇怪な笑顔だった。直後、

「うぐっ」

白目を剥いて瞳は体をそらせた。

「瞳!」

口から泡を吹き、気を失っているようだった。

瞳は救急車で運ばれた。命に別状はないが入院となった。

「いったい、何があったんです?」

病院のロビーで、幸一はうなだれている扇谷父子に訊ねた。

「あの女、つきまとっているんだよ……」

絞り出すように、竹三さんは語った。

八月の初めの雨の日に豊雄が知り合ったという女。山の中のラブホテルの中で竹三さんが見た幻影。そして、部屋中に散乱する、ねずみの死骸<sup>しがい</sup>の入った大量のフェンガー……泣きじやくる豊雄の頬をはたくと、豊雄もようやく我に返り、ことの異常さを察知した。真子が人間ではないことに恐れをなし、父さん何とかしてくれと泣きついてきたのだそうだ。

「俺はとにかく豊雄を女から離そうと、白浜の奈波のところで暮ら

すように言ったんだ。だがそれも無駄だった」

豊雄が白浜に行ってから数日後、奈波から電話があったのだという。豊雄と真子の結婚を認める。真子は今一緒に白浜で暮らしていて、毎日料理を作ってくれる——聡明な奈波が、嬉しそうに告げた。

竹三は異変を感じ取り、その夜のうちに太郎と共に白浜へ行った。

奈波の住んでいる家に飛び込むと、なぜか白い鳥の羽が玄関や廊下に散らばっていた。リビングから笑い声が聞こえたので入っていると、真夜中だと言うのに奈波と豊雄がテーブルに向かい合っていて笑っていた。二人のあいだには卵が山と積まれた銀のボウルがある。

あらお父さん本当に来たのね、一緒に食べましょうよ——奈波は卵を一つつまみ上げると、殻からごと口に放り込んでぐくりと飲み込んだ。

美味しいわ、と微笑むその目は人間のそれではなかった。爬虫類はちゅうるいだ。

「……奈波も今、病院にいる」

同じく卵を丸のみにしようとしていた豊雄のほうは、頬をひっぱたくと、ラブホテルのときと同じように我に返ったそうだ。しかし奈波は戻らなかった。うわごとのように「料理が上手よ、料理が上手」とつぶやき続けていたらしい。

「真子にやられたんだ。あの女、どうしたってつきまどってくるん



だ。豊雄が瞳と結婚した今だって……」

幸一は信じられなかった。豊雄との縁を切りたい「悪い女」というのは、化け物だというのか……？ 竹三さんはそういう類たぐいの話を信じない性質だったはずだ。

しかし思い返してみれば、幸一には合点のいくことがいくつあった。盗まれたはずのフェンガーが見つかったと報告を受けたのは八月の十日前後だったろう。どこにあったのかについて竹三さんはあいまいにごまかし続けた。豊雄と瞳の祝言のときに奈波の姿がなかったのも、入院していたからなのだろう。

「どうすりやいい、幸一？」

問われても答えようがなかった。太郎さんも頭を抱えるだけだ。

「俺に、心当たりがあります」

そのとき、幸一の弟、正司が口を開いた。

「昔、バイクで走り回っていたころのツレに、島本ってやつがいま  
す。そいつは悪さやめてから寺に入ったんだけど、霊能力に目覚め  
たようです。噂では寺をやめて高野山こうやさんの近くにこもり、霊の退治み  
たいなことをしているらしいんです」

「霊の退治だって？」

そんな友人がいるなど、幸一は聞いたことがなかった。

「化け物とか悪霊とか、そういうものを冷蔵庫に閉じ込めるんだそ

うです。やつの住まいに遊びに行ったことのあるツレの話じゃ、家の周りが冷蔵庫だらけだったって」

「お前、こんなときに冗談を言うんじゃないぞ」

幸一は弟を睨みつけたが、いたって真剣だった。

「冗談じゃないぜ兄貴。安川やすかわの店の幽霊屋敷あったろ？ あそこの幽霊をやっつけたのは島本なんだよ」

二人の共通の知り合いが、数年前に居酒屋を開いた時にそういうモノに悩まされていたのだった。

「正司、頼む。その島本さんに頼んでくれ」

竹三さんは懇願こんがんするように、正司に言った。

6. 八月三十一日 島本邦海ほうかい

正司がすべてを話し終えるのに、たっぷり一時間が経過した。相手がしゃべっているときは止めずに聞くのが邦海の方針だ。

なんて執念深い女だ。

話を聞いているあいだじゅう、邦海の頭の中を占めていたのはその言葉だけだった。

「……どうだ、島本」

正司は額の汗を拭ふきながら訊ねてきた。

「真子とかいうその女を、豊雄から引き離せるか？ 俺の姪の瞳の命も危ないかもしれないんだ」

鬼気迫る表情だった。

邦海は口を結んだまま、正司の顔をじつと見る。窓を塞いでいる冷蔵庫たちが、ヴーンと旧式特有の音を立て続けている。

「正司よ」

たっぷり黙ったあとで、邦海は言った。

「今からショックを受けることを言うぞ」

「な、なんだよ？」

この顔。うんざりする気持ちを抑え、邦海は告げる。

「お前はもう、五十回以上ここで同じ話をしている」

「……ん？」

正司の顔は歪んだ。

「どういう意味だ？ 俺は昨日、竹三さんに頼まれて、お前に連絡を入れて、今日初めてここに」

「初めてじゃないんだよ」タブレットを手繰り寄せ、邦海は操作する。「玄関に取り付けてある防犯カメラの映像だ」

日付を一日戻す。生い茂る木の陰から、正司の車が現れた。

「昨日も、お前は来てるんだ」

「いや、これはさっき来たときの映像だろ」

「服を見てみる」

運転席から降りてきた正司の服は、今、邦海の前にいる正司のそれと違っていた。

「昨日だけじゃない。先週も、先月もだ」

日付を戻しながら、正司の車の写っている部分だけを見せ続けた。

正司はぶるぶると震えだした。

「そんな、俺は今日、ここへ初めて……」

「俺が阿方真子を冷蔵庫に封じ込めたのは、去年の九月二日のことだ。もう一年になろうとしている」

「……………は？ ……いや、何を……………」

正司は混乱しているようだった。

「幸一さんにはさつき連絡を入れた。もうそろそろ迎えに来てくれる」

「兄貴が？ 兄貴がどうして」

「いつも通りなんだよ。漁師仲間のシゲさんも一緒だ。お前の車を運転していっただけだからさ。お前の車も一緒だ」

「おい、わからないよ、何を言っているんだ、お前！」

「鎮静剤を持っているんだろ？」

有無を言わず邦海は言った。

「いいから、それを飲めよ」

信じられなさそうに目を潤ませる正司の表情——一体、何度見たことだろう。

\*

山道を降りていく二台の車を見送ったあとで、邦海は玄関の引き戸を開いて上がり、居間へ進んでいった。

壁をひとつ潰す形で、銀色の箱が屹立きりりつしている。

高さ二・五メートル、幅一・五メートル。かつて神戸の中華まん工場で使われていたものを譲り受けた、この家でもっとも大きい冷蔵庫だ。鎖でがんじがらめにしてあるが、この一年、あいつが来るたびにガタガタ揺れる。

「お前、いい加減にしろよ」

邦海はつぶやいた。

阿方真子というのが本当の名かどうか知らない。なんとかインという名の廃ラブホテルには複数の女の情念が絡み合い、禍々まがまがしいものに醸成じょうせいされていたのだろう。それがどうして蛇性の化け物に変化してしまったのか、そしてなぜ扇谷豊雄に目を付けたのか……そんなことは邦海にはわからなかった。もともと念の動きに理由などないのだ。

ただわかるのは、瞳という女に入って暴れているとき、真子が想念の矛先を移したということだった。正司の兄の話によれば、瞳は気を失う直前、正司の顔を見て、ニヤリと笑ったのだった。

去年の九月二日、扇谷家を訪れたときにそれは明確だった。豊雄の部屋にいついていた髪の毛濡れた女は、豊雄ではなく正司に念を向けていた。それを邦海は、この銀の冷蔵庫に封印したのだ。

大した戦いをせずに、勝利した。

ただ、蛇だから冷却すればおとなしくなるだろうと安易に思っていたのが間違いだったようだ。

何度追いつ返しても正司は、初めてのような顔をしてここへやってくる。真子が呼んでいるとしか思えなかった。

「……保冷しちまったのかな」

ガタリ、ガタリと冷蔵庫の扉は揺れ続けている。

怨霊や他の動物霊と比べて、だいぶ執念深い。これ以上どうすればいいのか、邦海にはわからなかった。

(終)